

留学生支援システムにおける 日本語チュートリアルの実施概要とその意義 — 2011年度5月から8月の実施記録を資料として—

The Overview and its Significance of Japanese Tutorial in the Support System for International Students:
through Reports from May to August in 2011

中山 英治

要旨

2011年度早稲田大学日本語教育研究センター（以下、日本語センター）から出された特定課題研究助成費の課題研究「自律的日本語学習の支援を基盤とした留学生支援システムの構築」（研究代表者：細川英雄）が採択され、日本語センターでは教職員から構成される研究組織が立ち上がった。さらに、留学生支援システムの一環として「日本語チュートリアル」を計画し実施した。本稿では、この日本語チュートリアルの実施概要を述べ、そこから学習者の自律的な学習を支援する日本語チュートリアルの意義を指摘した。概要では、実施形態として期間、場所と日時、支援スタッフ、実施の方法を説明した。また、実施記録から学習者の利用状況や相談内容、支援スタッフの対応の仕方や振り返りなどの特徴をまとめた。このまとめから日本語チュートリアルの意義として留学生への「学習支援のボトムアップ的なフォロー」や支援スタッフにとっての「学びの人間関係構築」を指摘した。

キーワード：日本語チュートリアル、学習支援、学習計画、支援スタッフの成長

0. はじめに

2011年度、早稲田大学日本語教育研究センター（以下、日本語センター）から出された特定課題研究助成費の課題研究「自律的日本語学習の支援を基盤とした留学生支援システムの構築」（研究代表者：細川英雄）が採択された。これを機に日本語センターでは教職員から構成される研究組織を立ち上げて、本留学生支援システムの一環として暫定的に「日本語チュートリアル¹⁾」を計画し実施した。本稿では、この日本語チュートリアルの実施概要を述べて、そこから学習者の自律的な学習を支援する日本語チュートリアルの意義を指摘したいと思う。

本稿の構成は、次の通りである。

1. 日本語チュートリアルの実施形態
2. 日本語チュートリアルの実施記録
 - 2.1 日本語チュートリアルの実施記録より①
 - 2.2 日本語チュートリアルの実施記録より②
3. 日本語チュートリアルの意義
4. 報告のまとめと今後の実施に向けて

また、本稿を執筆するにあたって使用した資料は、次の通りである。

- 資料 1. 「留学生支援システム」および「日本語チュートリアル」の理念と支援スタッフの役割（支援スタッフガイダンスに関連する資料を含む）
- 資料 2. 留学生支援システム WG の各打ち合わせ報告書
- 資料 3. 留学生支援システムにおけるメーリング・リストの記録
- 資料 4. 日本語チュートリアルの記録（2011 年 5 月～8 月）および報告書集計（春学期）
- 資料 5. その他、留学生支援システムに関連する各媒体

1. 日本語チュートリアルの実施形態

1.1 期間

本留学生支援システムでは、留学生支援システムの具体的な支援の一環として、早稲田大学に在籍する（あるいは入学が決まって在籍予定の）留学生の日本語学習を通常のカリキュラム内の授業とは別にそれ以外で支援・サポートする「日本語チュートリアル」を企画、設置した。日本語チュートリアルの本格的な設置期間は、2011 年 5 月から 2011 年 8 月（2011 年度日本語センター春学期期間）であった。通常春学期は 4 月開始であるが、このように 5 月開始になっている背景には、2011 年 3 月 11 日に起きた未曾有の大地震（東北地方太平洋沖地震）の影響があった。地震の影響により春学期の開始が遅れたことで日本語チュートリアルの開始もともに遅れた経緯があった。なお、4 月には、地震の影響により来日の困難な学習者のために日本語学習のためのメール対応中心のサポートを準備したり、簡便な体制の中で学期前のチュートリアルが行われたりした。また、5 月 10 日と 17 日の両日には文字の学習に特化した「仮名チュートリアル」が実施されたことを付記しておく。

1.2 場所と日時

本留学生支援システムは、早稲田大学における留学生の留学生活や学習環境の十全な環境整備を謳う研究計画により実現し始めたものであるが、通常日本語センターで設置されているカリキュラム上の日本語科目における教室での学習だけでは大規模な学習者たちのニーズ、履修計画、真に必要な日本語学習の受け皿として機能していない現状があった。そこで、授業科目以外で学習者のサポート²⁾を請け負うための支援システムを構築する必要があったわけであるが、日本語チュートリアルはまさにその体現化された空間であったと言える。

学習者が集まって日本語学習のサポートを受ける以上、そのサポート空間が現実的に必要となるが、留学生支援システム専用の研究室や教室は、初めから設置できるといった厚遇は大学から期待できるものでもない。大学運営の側面から考えても至極当然のことであろう。そこで、日本語チュートリアルは、通常使用している教室の空き時間を利用して、実施されることとなった。実施した曜日と時限は、月曜日 3 時限目、火曜日 5 時限目、金曜日 5 時限目の週 3 日間であった。各曜日の開催場所は、月曜日 616 教室、火曜日 507 教室、金曜日 512 教室であった。この開催の曜日については、後から述べる支援スタッフとなる早稲田大学日本語教育研究科所属の大学院生の都合を勘案したところが大きい。合わせて、来訪する留学生の日本語科目がそれほど入っていないと思われる 5 時限目を用意したという事情もあった。（月曜日は空き教室がないことから 3 時限目に実施となった。）

中山英治／留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義

表1 資料5に含まれる「日本語チュートリアル」ポスターより作成

| 2011年5月23日～8月2日の毎週 月・火・金曜日 | | |
|----------------------------|---------------|-------------|
| 月曜日 | 13:00 - 14:30 | 22号館6階616教室 |
| 火曜日 | 16:30 - 18:00 | 22号館5階507教室 |
| 金曜日 | 16:30 - 18:00 | 22号館5階512教室 |

春学期の終了後に日本語チュートリアルの日程すべてを対象とした集計を行った結果では、実施曜日の差も表れて、月曜日、火曜日、金曜日の順に来訪者の数が増えていく結果であった。週末の金曜日に来訪者が多くなる事実は、今のところ特にその原因がはっきりしていない。また、春学期実施のこの結果が継続して次学期にも繰り返されるかどうかについては本執筆途中（秋学期中間時点）でその事実はないことを見ると、原因は曜日時限の単一的な問題ではなく来訪者の都合や実施の評価など、複合的な原因を探る必要があるように思われる。こうしたことは今後の課題となろう。

1.3 支援スタッフ

日本語チュートリアルの支援スタッフは、早稲田大学大学院日本語教育研究科所属の大学院生に公募をかけて選出した。資料『留学生支援システム』および『日本語チュートリアル』の理念と支援スタッフの役割によると、「Ⅱ. 日本語学習リソース／留学生サポート：支援ネットワークの構成要素」として、支援スタッフが「ヒトとしての日本語学習リソース」と位置づけられている。また、同資料「Ⅳ. 支援スタッフの役割」には、日本語チュートリアルの第一運営者として支援スタッフがあり、「専門家や日本語教師ではなく、同じ学生として留学生を支援＝ピア・サポート」という位置づけがなされている。このことは非常に重要なことで、同資料には指導や教育を行う場ではなく、同じ立場で友好的な対話を通じて支援を行う理念が掲げられており、日本語チュートリアルの支援スタッフとして日本語教育の素養もある日本語教育研究科の大学院生に担ってもらう意図がここには十分含まれていると言える。

公募の際には上記のような位置づけも応募者に部分的に理解してもらう必要があり、各応募者に実施可能な曜日と時限の他に支援可能な言語や志望動機などを備考として伝えてもらった。また、同時に応募要項の中には具体的な支援の業務内容を加えて、日本語チュートリアルに参加する際の心構えも持ってもらうような配慮をした。以下はその際に説明した業務内容である。人選については、日本語チュートリアルの研究スタッフである教職員が複数名で選んだ。

表2 資料3に含まれる日本語チュートリアル「応募者一覧」より作成

| | |
|------|---|
| 業務内容 | 同特定課題研究の一環として開発・運営に取り組む「日本語チュートリアル」に支援スタッフとして参加する。教職員と協力しながら、次のような活動に携わる。 |
| 活 動 | a 留学生が自律的に日本語を学べる環境を整備する。留学生の自主的な日本語学習を支援する。 |
| | b 留学生が充実した留学生生活を送れる環境を整備する。留学生の修学活動を間接的に支援する。 |
| | c 支援スタッフの専門知識・経験を活かした留学生向けのグループ学習などを企画・運営する。 |
| | d 定期的開催されるワークショップなどへ参加し、留学生支援への理解を深める。 |
| | e その他、日本語チュートリアルの運営に関わる作業を行う。 |
| | ※ a. については「日本語チュートリアル」として開室する日本語学習支援室のスタッフとして勤務する。 |

1.4 実施の方法

ここでは、日本語チュートリアル具体的な実施方法について述べておきたい。1. 3で述べたような人選を行って、日本語チュートリアルを実施する各曜日に5名から6名のスタッフを配置してシフト表を作成し、その中から毎日3名が実際の支援スタッフとして業務についた。また、初回の5月23日(月)から各曜日の初回日の実施直前に支援スタッフを集めて、日本語チュートリアルに関わる教職員とともにガイダンスを行った。そこでは、あらためて日本語チュートリアルの理念やアドバイジング上の留意点、学習計画の奨励などを伝達した。日本語チュートリアルの理念や運営の方法は研究スタッフの方も手探りの状態であったため、こうしたガイダンスの内容が完全ではなかった面もあったかもしれないが、支援スタッフの育成やチーム・ワークの充実も視野に入れるとすれば、こうしたきめの細かい指示も必要不可欠なものであるように思われる。

毎回の日本語チュートリアルのサポートでは、第一に教室の環境作りがあった。通常使用している大学の教室を1部屋借りて行うので、教室には椅子や机はもちろんのこと、AV機器や黒板などは備え付けのものとして揃っていた。しかし、実際のサポートを行う上で必要と思われる教材や文房具、資料等も常時そろえておく必要があり、それらは日本語チュートリアル専用の小型ワゴンを用意して、そこにボックスを置き整理した。また、サポートを行う上で必要と思われたPCやプリンターなどの機材も設置した。

日本語チュートリアルで最も時間をかけて教員が打ち合わせを行った実施方法に報告の仕方がある。ここで言う報告とは、毎回の日本語チュートリアルで実施されたサポート内容の報告である。スタッフの誰が来訪者の誰にどういった内容でサポートを行ったのかを報告するものである。この報告の意味はどこにあるかと言えば、次のような目的が考えられるだろう。

- 1) 日本語チュートリアル実施の基本的な記録：いつ・どこ・だれが・なにをしたか
- 2) 日本語チュートリアル実施の共有や継続：スタッフが共有する資料として必要
- 3) 日本語チュートリアル実施に関する研究資料：来訪者分析やスタッフの振り返りに利用

当初春学期の実施に関して言うと、これらのうち3)の理由は初めから予定されていなかった。今期の日本語チュートリアルは、まだサポート体制も充実しておらず、様々なことが保留もしくは手探りの状態であったためこれを研究対象としないことが研究スタッフおよび支援スタッフの間で共有されていたのである。

最も問題があったのは、1)と2)に関係する来訪者である留学生の個人情報の管理や扱いに関してであった。記録として報告を書くと、留学生の氏名や学籍番号、また相談内容が記載されることになる。これが記録として保管されると嚴重な取り扱いの注意の対象となる。日本語チュートリアルのメンバーは教職員全体で十数名の関係者が存在するので、どこでどのように管理する必要があるか、どこで情報が漏れてしまうかなどといった危惧が常に指摘されていた。また、報告や記録によってサポート体制の充実のためにという目的で個人情報が記載されている報告を共有したり閲覧したりすることが倫理上問題がないのかといった配慮が繰り返し議論された。結果としては、報告については、「日本語チュートリアルの記録」という報告書を作成し、毎回の日本語チュートリアル後に来訪者1人に対して1枚を支援したスタッフが報告するという体制³⁾となった。これは専用のファイルに綴じられてワゴンにだけ設置された。

そうした報告を共有しながら日本語チュートリアルが進んでいったわけであるが、報告の中には支援スタッフが対応に困るといった悩みや日本語チュートリアルに関する意見やコメントを記載する

中山英治／留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義

ことも見受けられるようになった。前者については、その報告を受けながら研究スタッフである教員が「早稲田大学日本語教育研究センター学習支援室対応マニュアル（名称は当時のまま）」といったマニュアルを作成して、支援スタッフへの対応改善に利用した。以下はそのマニュアルの簡易版である。相談内容はこれ以外にも複数含まれている。

表3 資料5に含まれる「早稲田大学日本語教育研究センター学習支援室対応マニュアル」簡易版

| 分類 | 状況／相談内容 | 対応例 |
|-------|----------------|---|
| 対応全般 | 複数の来訪者の場合 等 | ・時間を区切る、1対複数対応 ・チューターの役割を考える |
| 日本語学習 | 作文やスピーチ原稿の添削 等 | ・一方的に添削しない ・ライティング・センター等の適所を紹介する |
| 大学生活 | サークルに入りたい 等 | ・留学生用のサークル入会ガイドを紹介する ・インターネットで紹介ページを見る |

このマニュアルは、教員のワーキング・グループ内で報告の中の事例を分析しながら随時修正を施していった。将来的にはアドバイジングの留意点とともに1冊のサポート・マニュアルに昇華されることが期待される。支援スタッフに関しては、特に今後のスタッフの育成や補充などに関わって、スタッフ・ディベロップメントに関係する議論が必要である。支援スタッフは留学生支援システムの実践的な人材リソースである。支援スタッフのさらなる充実や教育体制作りは、日本語チュートリアルの実績をもとにして今後大学との交渉に入る必要がある。

2. 日本語チュートリアルの実施記録

ここからは実際の日本語チュートリアルのサポート実施の記録である資料4。「日本語チュートリアルの記録（2011年5月～8月）」を材料にして述べることにする。特に、次の2.1では学習者の利用状況、相談内容に関して特徴のあった事実を述べる。続いて、2.2では記録に記載された支援スタッフの具体的な対応方法や振り返りなどを述べる。

2.1 日本語チュートリアルの実施記録より：学習者の利用状況・相談内容など

まずは、日本語チュートリアルの報告の全体的な集計結果を示しておきたい。これは、資料3に含まれる「日本語チュートリアル 支援スタッフ担当シフト表：利用者数集計つき」と資料4に含まれる「留学生支援システム：日本語チュートリアル報告書集計（2011年度春学期）」を参考にしたものである。

表4 曜日別来訪者集計結果

| 曜日 | 人数 | 回数 | 平均 |
|-----|----|----|-----|
| 月曜日 | 19 | 12 | 1.6 |
| 火曜日 | 29 | 14 | 2.1 |
| 金曜日 | 40 | 11 | 3.6 |
| 合計 | 88 | 37 | 2.4 |

(5月10日、17日の仮名チュートリアルの人数を含む)

この集計結果を見ると、月曜日から火曜日、金曜日と来訪者数が増えていることがわかる。この集計は述べ人数であり、曜日をまたいで複数回に渡り来訪した留学生も含まれるので厳密なことは言えないが、春学期の実施に関してだけ言えば、週の初めよりも週末の方が参加しやすかった可能性がある。少なくとも支援スタッフは曜日ごとに固定ではなかったので支援スタッフに対する相性の良い悪いなどには関係ないと思われる。留学生の授業の都合や火曜日と金曜日の5時限の実施等が影響していると考えられる。

集計結果の詳細を見ると、春学期の実施期間中に来訪者が最も多かった日には6名（6月10日（金））があり、最も少なかった日では0名（6月20日（月）、7月5日（火）、8月2日（火））があった。最高人数であった6名のうち、4名は日本語の授業関連の相談で留学生の最も典型的な相談内容であったと言える。また、2名は、両者とも複数回来訪する留学生で、この日に限らず利用が多かった学生であった。また、6名の来訪があった6月10日（金）以降、6月13日（月）、14日（火）、17日（金）の連続する日はすべて5名の参加であった。10日に参加した複数回来訪する留学生2名を含んではいるが、その他は新規の留学生で、かつ授業に関連する日本語相談を持ち込んでいることから、利用した留学生間のネットワークや宣伝の効果などで利用価値が理解されていた可能性がある。また、学期の中間期にあたり、中間テストなどの評価に関わる相談の可能性で来訪が増えることが予想される場所でもあったが、報告の記録を見る限りではその事実はなかった。

続けて、以下の表5. を参照されたい。これは、「留学生支援システム：日本語チュートリアル報告書集計（2011年度春学期）」の一部から作成した表である。

表5 来訪者の所属・レベル・相談内容の集計結果

| 所属 | | レベル | | 相談内容 | |
|---------------|----|---------|----|---------|----|
| 日本語専修課程（別科）生 | 43 | Level 1 | 7 | 日本語学習 | 80 |
| 国際教養学部（SILS）生 | 10 | Level 2 | 18 | 日本語学習以外 | 6 |
| 大学院生 | 24 | Level 3 | 3 | 大学生活 | 1 |
| 他学部生 | 7 | Level 4 | 15 | その他 | 9 |
| その他（教授・研究員など） | 4 | Level 5 | 13 | | |
| 述べ人数合計 | 88 | Level 6 | 9 | | |
| | | Level 7 | 11 | | |
| | | Level 8 | 4 | | |

この集計結果を見ると、早稲田大学の日本語センターにおける最も中心的な日本語学習者としての別科生の利用が43名で来訪者の所属としては多いことがわかる。この事実は当たり前の事実であるとして、逆に今後の来訪者の増加をどこに見込めば、大学全体における留学生の自律的学習のサポートにつながるのかという発展的な方向を考えることができるだろう。意外に日本語学習が必修の単位とされているSILS生の利用が少ないことが気になることである。一方、大学院生の述べ人数が24名と多いことが今回の集計でわかるが、その内訳を詳細に見てみると、理工学研究科の述べ人数が9名という結果であり、複数回来訪した一人の留学生で8回カウントされているためあまり意味のある数字とは言えない。その他の大学院生の内訳を見てみると、日本語に関する相談を持ち込んだ経済学研究科、政治学研究科、アジア太平洋研究科の留学生7名や同じく日本語学

中山英治／留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義

習上の相談を中心に来訪した文学研究科，教育学研究科，商学研究科の1，2名ずつであった。商学研究科の相談では専攻を反映した「就職したい会社の社長宛てのメール添削」や「会社用履歴書の修正など」が見られた。他学部生の来訪者数は7名で少ないが，詳細を見れば，文学学術院（文化構想学部や第一文学部），政治経済学部，教育学部，理工学部とあり，日本語の相談を普段する場所もなく，行き場に困ったであろう留学生の姿が見えてくる。例えば，理工学部の学生では「ち」と「つ」の発音の区別や練習に関する相談であったり，政治経済学部の学生では「日本語の学習方法」に関する相談であったりした。来訪者の多かった別科生やSILS生などは日本語学習が単位として必要な動機を持つ所属学生であり，また日本語チュートリアルの開催場所にも近いこともあって，その点で他の留学生よりも来訪者が多いことは至極当然であるが，この他学部生のニーズといったものを今後いかに救っていかんかという点は，大学全体の留学生教育の観点から見た課題としても非常に重要な課題であると思われる。述べた人数が少ないからと言って無視できる問題では決してないだろう。早稲田大学は諸大学に先駆けて研究や教育の国際化を進めてきている先進的な大学であると言えるが，大学内部の留学生教育や留学生支援環境の十全な体制作りができてこそ，真に国際化された大学であると言えるのではないか。

この所属や相談内容の他，集計ではレベルに関しても集計結果を出しているが，当初いくぶん予想のあった初級レベルの来訪者数などは特に目立った特徴が見られない。今回実施した春学期だけでは統計的な処理もできないので何とも言えない。今後，継続的に実績を積み重ねることによってさらにデータを増やし統計的な裏付けなどを施せば，レベルに関する事実も指摘できるかもしれない。

資料1. の「『留学生支援システム』および『日本語チュートリアル』の理念と支援スタッフの役割」の「I. 留学生支援システム 1. 設置理由」にある通り，この支援システムの具現化である日本語チュートリアルは，「留学生の抱える問題を包括的に解決できる支援体制」の一環として位置づけられるべきものであり，そういう意味からすると，留学生生活全般に関わる幅広い相談内容を射程に入れる必要があったかもしれない。ところが，相談内容の詳細を表5. で見てみると，相談内容の区分の中では「日本語学習」が80件と圧倒的に多かった。つまり，春学期の実施においては，大学生生活上の悩みや日本語学習以外の相談は周辺の相談であり，日本語学習は最も中心的な相談内容であったわけである。ただし，このことから短絡的に日本語チュートリアルの評価を下げるべきではない。ポスターやチラシなどによる広報や宣伝方法の影響もあるし，日本語教育研究科の大学院生が支援スタッフであることや開催場所が日本語センターである以上，留学生が期待する相談内容の中心が日本語学習の相談に偏ることはむしろ当然と言えば当然である。春学期の集計結果を真摯に受け止めるならば，日本語チュートリアルが資料1. の「2. 設置理念」に謳われている「個々の留学生が自律的日本語学習を実現できる学習環境」として十分機能を果たせるべく十全な体制づくりを目指さなくてはいけないのだとも言える。

相談内容で多かった日本語学習の相談は，大きく分けると次の3つであった。

やはり留学生らは，日本語を使う（話す）機会を欲していることが如実にわかる結果であった。これは現在実施されている秋学期の中でも継続している来訪の理由となっている。厳密に言えば，「話すためにはどうしたらよいか」とか「話す相手を見つけるには何をしたらよいか」といった内容ならまさに相談と言えるが，日本語チュートリアルの場そのものを「日本語が使える（話せる）場」として来訪するのは相談とは言えない。こうしたことは支援スタッフも折に触れて，日本語

表6 日本語学習の相談ベスト3

| 相談項目 | 相談内容 |
|-----------|-----------------------------|
| 会話練習 | 自然に話したい, 話し相手がほしい, 話す機会がほしい |
| 作文・レポート添削 | 文法や語彙の間違いのチェック, レポートの書き方 |
| 授業で出された課題 | テキストの質問, 課題インタビューの協力依頼 |

チュートリアル of 趣旨をうまく伝えきれていないもどかしさを教員に訴えていたこともあった。

作文やレポートの添削という依頼も多かった。授業で課されたとみられる作文の文法的な誤りを指摘してほしいとか、自分の言いたいことがきちんと書かれているかどうかを見てほしいとかいった依頼である。春学期でも秋学期でもこの書いたものの添削に関しては、共通して「研究計画書」の類の添削を禁じることにしていた。入試に関わるこの手の添削では、公平性を求められる性質を持つので全面的に禁止することにした。

履修している日本語の授業で出された課題の質問は、日本語を学習している留学生にとって喫緊の相談であったり、相談として持ち込みやすいものであったと思われる。中には、「明日の日本語クラスでテストがあるから、授業のプリントを復習したい。」とか「明日の授業でスピーチを行うので、その練習をしたい。」といった駆け込みの相談も見られた。こうした相談も日本語チュートリアルが理念的に掲げている留学生の自律的な日本語学習の促進であると継続的な学習計画を支援するという趣旨からほど遠い相談になっていると言え、はたしてこうした相談への対応が的確に行われたかどうかについては十分に振り返っておく必要があるだろう。今回の支援スタッフの対応では、ただ来訪者のリクエストを聞いて満足感を得てもらおう対応ではなく、留学生が本当に言いたいことを内省させたり、課題から展開される発展的な課題を出してみたりと様々な対応上の工夫が見られたこともあり、評価してよい。こうしたこと背景には、支援スタッフを支える教員スタッフのアドバイスやシステマティックなものではないにしても支援スタッフ間の協力体制の芽生えなどがうまく働いた部分があったように思われる。

2.2 日本語チュートリアルの実施記録より：支援スタッフの対応の仕方や振り返りなど

次に2.1と同じ資料である日本語チュートリアルの実施記録から、日本語チュートリアルの中心的な支援スタッフであった日本語教育研究科の大学院生の対応ぶりがわかる記事を抽出して、支援スタッフが具体的に相談内容にどのように接したのかをいくばかりか述べてみたい。

具体的な対応の分析に入る前に確認しておかなければならないことは、日本語チュートリアルで支援スタッフに期待された役割のことである。資料1.『『留学生支援システム』および『日本語チュートリアル』の理念と支援スタッフの役割』の「IV. 支援スタッフの役割 日本語チュートリアルの第一運営者 6. 具体的な支援スタッフの役割」によると、支援スタッフの役割として大きく次の3つの役割があった。

日本語チュートリアルにおいては開始前（春学期には初週の各曜日に実施）に支援スタッフへのガイダンスを行い、この役割意識をもってもらうように教員スタッフが指導した。支援スタッフが自らの仕事を進める中でこの3つの役割を意識して進めたことになる。実際、実施記録を分析すると、それが反映された記述が見られた。この3つの役割の中では、ナビゲーターとしての仕事が比較的遂行しやすいようであった。この日本語チュートリアルではナビゲーター先となる大学内の関

中山英治／留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義

表7 日本語チュートリアルにおける支援スタッフの役割

| 役割 | 内容 | キーワード |
|--------|--|----------------|
| ナビゲーター | 日本語チュートリアルを訪れた留学生を学習リソース／留学サポートに導く。ニーズに沿ったリソースや情報紹介，専門家／専門箇所へつなぐ。 | つなぐ 紹介する |
| アドバイザー | 計画的かつ継続的に学習リソース／留学サポートに導く。学習アドバイジングと留学生アドバイジング，学習に関する自己管理ツールの紹介など。 | 学習を支援する 励ます |
| リソース | スタッフ自身がリソース（専門的知識・話し相手）になる。学習者や生活者としてのメンターの役割。リソースの検索・独自開発など。 | 相手になる 探す・創る |

係箇所として、早稲田大学留学センター、同保健センター、同ライティングセンター、同国際コミュニケーションセンター、その他諸サークルなどとの連携を図っている。留学生の相談内容に応じて、そうした関係各所にナビゲートする役割が最も効果的に遂行されたようである。支援スタッフは、ナビゲート用に日本語チュートリアル・ワゴン内に各種資料を整理し、その準備に備えていた。支援スタッフ自身がリソースとなる役割でも後の分析で述べる問題以外は、支援スタッフの専門性や知識を発揮できた面があった。

3つの役割の中で最も難しかったのはアドバイジングであったようである。留学生が持ち込む相談内容は、喫緊の日本語授業の課題や宿題であったり、取り急ぎ作文を添削してほしいとか、スピーチ原稿を直してほしいとか、要望も何もなくなただふらっと立ち寄ったりといった来訪者もいたので、相談内容から見てアドバイジングを施す機会を持ってないこともあった。また、一口にアドバイジングと言っても、それを真剣に行おうとすれば専門的な知識や技術が必要になってくるし、留学生の心に触れるようなナイーブな問題にも触れざるを得なくなってくるわけで、そうしたことは今回の支援スタッフには荷が重い状況であった。こうしたことは、スタッフ・ディベロップメントの問題⁴⁾でもあり、別途留学生支援システム全体の中で考えるべき問題であると言える。

以上の前提となる支援スタッフの役割を踏まえた上で、支援スタッフの対応方法の分析を試みたい。この分析のために日本語チュートリアルの実施記録を便宜的に3期に分けて資料を整理した。第1期(5月10日～6月7日)、第2期(6月10日～6月28日)、第3期(7月1日～8月2日)の3期である。

まずは全期を通して支援スタッフの記録に見られたキーワードから、日本語チュートリアルの中で基本的な対応の仕方が形成されていたのではないかということを確認しておきたい。全期の記録中に見られるキーワードとして、「(来訪者)と一緒に」、「(来訪者に)～してもらった。」、「(来訪者は)～ができる。」などといった表現が顕著であった。「一緒に」というキーワードはその中でも非常に目立つキーワードで、支援スタッフの対応が独りよがりなものにならないように、常に来訪者の相談に寄り添いながら進められた一つの証拠でもある。資料1.に記載のある通り、「個別的な対話を重視したピア・サポート」である日本語チュートリアルならではの特徴が現れているとも言えよう。「(来訪者に)～してもらった。」というキーワードからは、支援スタッフの基本的な対応の中に留学生支援システムが理念として持っている「留学生の自律的学習の支援」が意識されていることをうかがわせるものである。何らかの相談内容に支援スタッフが主体的になって対応を施してしまえば、自ら問題を解決できるかもしれない留学生の可能性を閉じてしまうことになり、自律的学習の支援には結びつかない。また、支援スタッフが相談内容を吟味したり、支援の方法を探ったりする際の一つの手段として、来訪者のニーズや期待をまずは確認するという目的からもそ

の対応の仕方は適切であったと思われる。「来訪者と『一緒に』相談内容や課題について考え『てもらいながら』、日本語チュートリアルを進めていく」といった基本的な図式が形成されたと言いつてもよいだろう。

留意しておきたいキーワードは、「(来訪者は)～ができる。」という支援スタッフの評価づけである。これは実施記録の目的から考えると、来訪者の情報を許される範囲で支援スタッフが共有しようという意図で記載されるものであると理解できるが、中にはどうしても「指導者」のような立場で来訪者を観察してしまい、記録してしまうといったことがあるのではないだろうか。研究倫理上の許容の範囲で記録から事例を取り出すと、例えば次の例1は情報共有のための評価であると言えるが、例2はいささか振り返っておきたい事例である。

例1

「(省略) 日本語レベルがとても高いと言えます。他の学習者たちと組んで、活発的^{ママ}な会話を行いました。」

「日本語学習歴は3年目ということですが、読解力も高く、読み方に詰まっていた漢字もすぐにチューターに質問せず、自分で辞書を引いたり思い出すことで解決する姿勢が見られます。」

例2

「……日本語がとても上手だったので、例を出すとすぐにわかってくれていた……」

例1の前者は、日本語チュートリアルのその場での活動をどうするか判断に使われている評価であり、活動の指示を行う上で必要であったと思われる。また、例1の後者も文脈に指摘されている自律的な態度を観察する上で評価した部分であると理解できる。一方、例2は、授業で使用しているテキストの質問に応じて指導的な対応になってしまった例であるが、その時の教育的措置が理解できたかどうかで終わっている。来訪者のニーズや期待に応えた面では特に問題があるわけではないが、支援スタッフ側にそれ以上の意識があったかどうかを吟味しておきたい事例でもあろう。この事実はこの事例に特化するべき問題ではなく、支援スタッフとともに教員全体を含めて日本語チュートリアルに関わる際に留意すべきことではないだろうか。

3期に分けたうちの第1期に見られる特徴があった。それは、まだ来訪者の少ない日本語チュートリアルが大学全域に知らされていないだろうと推測して、広報や宣伝に関する提案を記載するといったものである。「支援内容を宣伝資料(ポスター)に乗せるのはどうか。」とか「(日本語チュートリアルが日本語学習の相談だけでなく、悩みや課題のサポートも行う場であるということ)留学生の授業を担当している先生方に宣伝してもいいと思う。」などといった提案である。始まったばかりのこの時期は、支援スタッフも教員スタッフも様々な部分で手探り状態であったが、支援スタッフの記録からもそのことはうかがえる。一つ興味深い事例に自律的な学習を支援すべきだが、自分の対応が本当にそのような対応になっているかどうか悩むという記事があった。資料1にあるような留学生支援システムの理念を「概念化された理念」として持ちつつも、具体的な対応では出せていないといった状況である。

第2期になると、「概念化された理念」も支援スタッフの中で幾分消化されてくるところがあり、対応の中で「段階的な学習計画」に言及しながら動くことができたり、「自律的な学習計画につながる目標シートの作成」や質問に応じて来訪者自身に「考えてもらおう対応」が生まれていた。また、この時期には数多くの典型的な日本語学習の相談に対応しながらも、日本語学習の相談で終わって

中山英治／留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義

しまっているのかという「理念を背景にした内省」も記されていた。

また、具体的な対応を経験する中で秋学期の実施にもつながっているような日本語チュートリアルの教室環境づくりや支援スタッフの体制作りに関するコメントも見えるようになってきた。例えば、前者の例としては「複数人の来訪者にどう対応するか」といった問題意識の芽生えや後者の例としては「支援スタッフの言語能力」や「留学生と同じ目線で対応可能な留学生の支援スタッフ」といった観点から記録がされることもあった。

春学期も終わり頃に近づく第3期になると、日本語チュートリアルに継続して複数回来訪してくる留学生の存在が見えてきた。その来訪者の相談内容も支援スタッフにとって必ずしも楽ではない、非典型的な相談内容であって、自ずと記録上でも支援スタッフや教員スタッフ間でも話題に上ることが多くなった。また、複数回の来訪ではなくても支援スタッフの対応力の範囲を越えてしまうような相談内容の場合もある。例えば、留学生の持ち込んだ相談で対応に困る事例を簡単に挙げておくと、次のような事例である。

表8 支援スタッフが対応に困った事例

| 見かけの相談内容 | 相談上の困難 |
|--------------|---------------------------------------|
| 日本語に関すること | 質問が瑣末、対応に反発する、対応を参考にしない など |
| 専門的な知識に関すること | 専門的な知識が必要な卒・修論指導、支援スタッフの知識の及ぶ範囲外の質問など |
| 留学生の心身に関すること | 留学生の心身上の相談、悩みごと、態度が反抗的 など |

このような対応に困る事例に関しては、今後もどのような検討をするべきなのか議論を続ける余地があるが、春学期の終わりに開催した事例検討会や教員スタッフからのアドバイスなどで支援スタッフを支えていく方法が春学期には取られた。また、記録を見ると、対応が困難な来訪者であっても、対応の中で学習目標を考えるためのシートを自ら作成して来たという報告や以前に対応した時より本人の参加態度に変化があったというコメントを残していることもあった。様々な問題がある中でも日本語チュートリアルを実施する意義が指摘できるように思われる。この節で述べたことを踏まえて次の節では、日本語チュートリアルの意義をまとめて述べたいと思う。

3. 日本語チュートリアルの意義

3.1 留学生にとっての日本語チュートリアル

来訪した留学生にとっての日本語チュートリアルの意義について考えたい。これまで述べてきたように、大学内の様々な箇所からそれぞれの日本語学習上の、あるいは日本語学習以外の相談を抱えてこの日本語チュートリアルに来訪したという側面から見れば、早稲田大学の学内における留学生教育の充実をボトムアップ的にフォローできる支援体制になり得るのではないかという意義を認めておきたい。早稲田大学（理事会）は2008年5月2日に「Waseda Next 125（理事会の基本的な考え方）」を提案し、重点施策として「グローバル・ユニバーシティとしての WASEDA」の構築を謳いあげている⁵⁾。そして、留学生の8,000人計画やグローバル・キャンパスの形成などを中心に教育の国際化を掲げている。優秀な留学生が大学で学ぶ上で日本語チュートリアルのような包括的で個別的な支援サポートが充実すれば、こうしたビジョンの実現にさらに近づくことができると

思われる。

留学という大きな学習上の転換を迎える留学生にとって必ずしも日本での学習や生活は、簡単なことではないかもしれない。現に本稿でも述べたことであるが、日本語学習の場を探しに来ていたり、日本語の話し相手を求めてきたりと学習上の困難をこの日本語チュートリアルで解決しようという留学生の姿があった。他の人には相談しにくい生活上の悩みなども気軽に相談できる日本語チュートリアルの存在意義は決して小さくないと思われる。

3.2 支援スタッフにとっての日本語チュートリアル

支援スタッフにとっての日本語チュートリアルについても述べておきたいと思う。特に日本語チュートリアルを経験した支援スタッフは、自らの日本語教師としての技術力や知識力を振り返る契機になったのではないだろうか。大学院カリキュラムの実践科目といった現場でもリアルな学習者を目の当たりにすることがあるとは思いますが、担当者のデザインした授業という形態の中でどれだけ主体的に関わりを持てるかといったことを考えると、日本語チュートリアルでは第一運営者として位置づけられており、関わり度合いは非常に濃い。ときには非常に困難な対応を迫られることあったり、自らの対応が来訪者の次の学習へつながったりとその充実感は非常に大きいものであっただろうと想像できる。そうしたことを鑑みれば、「支援スタッフの成長」といった意義が日本語チュートリアルに認められていいのではないだろうか。

また、支援スタッフとともに日本語チュートリアルに参画している教員スタッフとの関係性や支援スタッフ間の協働体制から学べる「学びの人間関係構築」といった側面も一つの大きな意義であると考えられる。

このように日本語チュートリアルは、自らの成長にしる、学びの機会の増長にしる、支援スタッフにとっても意義深いということが言えると同時に、留学生自身の意義も確認することができた。日本語チュートリアルにはそうした互恵性が価値として存在しているとも言える。

4. 報告のまとめと今後の実施に向けて

本稿では、早稲田大学の日本語センターにおける留学生支援システムが体現化された支援サポートの一環である日本語チュートリアルについて、その実施の概要と実施記録から考察される意義を中心に述べてきた。

2011年度春学期の実施後、日本語チュートリアルは新たに「わせだ日本語サポート」として、秋学期にも継続して実施されている。春学期の実施後に行われた事例検討会や教職員や支援スタッフの様々な形の反省も踏まえて新たな体制の下、「わせだ日本語サポート」は生まれ変わっている。中間的な報告をするならば、すでに開始から2ヵ月少しで来訪者数(述べ人数)は春学期の来訪者数(述べ人数)を超えている。春学期には地震の影響もあったかと思われるが、さらなる活動に向けた宣伝や広報などの効果とともに、このサポートの意義が留学生にも伝わっていると願いたい。まだまだ課題が多い「わせだ日本語サポート」ではあるが、学習者の自律的な日本語学習の実現や日本語教師への啓蒙をも含めた活動をさらに継続していかなければならないと思っている。そのための実績作りや研究活動への展開も今後の課題となろう。支援スタッフとしての大学院生の育成は喫緊の課題であるし、今後大学との交渉が必要な固定的な支援室の確保なども大きな課題と言

中山英治／留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義

える。今まさにサポートや支援を必要としている留学生の存在とそれを支えていこうとする支援スタッフの熱い思いが交錯したところに新しい道が開かれるのではないだろうか。

付記

日本語チュートリアルの運営や本稿をまとめるに際して使用した各資料作成に関しては、留学生支援システムのワーキング・グループ2「実践班」として日本語チュートリアルに携わった古賀和恵氏（早稲田大学日本語教育研究センター）、柳田直美氏（同）、宮崎七湖氏（同）の協力・協働体制が背景にあったことを記しておく。

注

- 1) 「日本語チュートリアル」は、2011年度秋学期の実施において「わせだ日本語サポート」と改称された。
- 2) 早稲田大学日本語教育研究センターでは従来学習者のサポート体制として、個人チューターや授業に参加する日本人ボランティアの支援などがあるが、これらは日本語授業科目に付随する支援体制であり、あくまで授業の延長上に位置づけられるものであった。これに対して、日本語チュートリアルは、日本語授業科目とは独立した形の支援体制となっているところが特徴的である。
- 3) 2011年度、秋学期のわせだ日本語サポートではネットポータルを利用した記録に切り替わっている。
- 4) 詳しくは、本誌所収の基幹論文「留学生支援システムにおける行動指針とスタッフ・ディベロップメントに関する検討」（守谷智美他）を参照のこと。
- 5) 「Waseda Next 125」（2008年度策定）の実施3年目に当たる2011年度11月現在、その中間総括を踏まえ新たに「Waseda Vision 150」が策定中で、「教育のグローバル化」は重点施策として継続的に進められる予定である。

参考資料

第一次資料

資料1. 「『留学生支援システム』および『日本語チュートリアル』の理念と支援スタッフの役割」（支援スタッフガイダンスに関連する資料を含む）。

第二次資料

資料2. 留学生支援システムWGの各打ち合わせ報告書。

資料3. 留学生支援システムにおけるメーリング・リストの記録。

資料4. 日本語チュートリアルの記録（2011年5月～8月）および報告書集計（春学期）。

資料5. その他、留学生支援システムに関連する各媒体。